

琉球大学学術リポジトリ

沖縄・国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ（1）

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2015-09-02 キーワード (Ja): シヌグ, 祭祀植物, ゴンズイ, 合掌型, 沖縄 キーワード (En): Shinugu, religious ceremony plant, Euscaphis japonica, joining hands type, Okinawa 作成者: 新里, 孝和, 芝, 正己, Shinzato, Takakazu, Shiba, Masami メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31737

沖縄・国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ（Ⅰ）

新里孝和^{1*}、芝 正己²

¹国頭村文化財保存調査委員/沖縄県文化財保護審議会専門委員,²琉球大学農学部亜熱帯地域農学科

Euscaphis japonica(Thunb.) Kanitz use in Shinugu, a religious ceremony in Ada village, Kunigami, Okinawa (Ⅰ)

Takakazu SHINZATO,^{1*}and Masami SHIBA²

*Kunigami village cultural properties preservation survey member/Expert commission
member of Cultural Properties of Okinawa Prefecture
Department of Subtropical Agro-Production Sciences, Faculty of Agriculture,
University of the Ryukyus*

キーワード：シヌグ、祭祀植物、ゴンズイ、合掌型、沖縄

Keyword: Shinugu, religious ceremony plant, *Euscaphis japonica*, joining hands type, Okinawa

Corresponding author (E-mail: shinri@trad.ocn.ne.jp)

シヌグの通説

シヌグ祭祀は、奄美群島の沖永良部島、与論島、沖縄群島の国頭村辺戸、奥、安波、安田、楚洲、大宜味村、名護市汀間、今帰仁村、本部町崎本部、備瀬、具志堅、伊野波、辺名地、伊江島、伊是名島の仲田、諸見、伊平屋島の我喜屋、伊江島、恩納村(18世紀前半)、うるま市の平安座島、宮城島、伊計島、浜比嘉島、津堅島などで行われ、途絶えて記録だけになっているもの、戦後また最近になって復活したもの、長く継続しているところがある。かつては少なくとも国頭間切の各村落にあったが、琉球国由来記成立のころまでには国頭村宇嘉部落以南で廃止され、ウンジャミ・海神折目・海神祭の中に融合されたのではないかと考えられている^{1、2、3}。シヌグ祭祀は国頭村ではおよそウン

ジャミと隔年に行われ、安波と安田が旧7月の最初の亥日、奥、辺戸、比地が旧盆あけの初めの亥日である⁴。

シヌグの語意はいくつかの説があって、1；災厄を祓い凌ぐ、2；シヌグ舞い、コネリ（踊り）、3；忍ぶ、4；1と2の折衷がある⁵。シヌグは2のコネリと同義語でコネリは踊りという意から、シヌグ舞という神遊び舞の行事であるとされ¹、3の忍ぶは北山から人目をしのんで安田にやってきた家臣ウファが農耕儀礼や行事を伝えたという説が紹介されている⁵。またイネや米の古称、ネイ、ニとか、八重山の古語シヌグミとの関連が残されているという⁶。幸地⁵は行事の内容面からみると明らかに災厄を祓う豊年予祝儀礼であるという。仲田²もシヌグは“凌ぐ”と同義で、暴風旱魃などの災害や疾病など諸々の災難を拭い凌ぎ、豊漁・豊作を祈願する神祭りとしている。しかし東

恩納は⁷⁾、「時代考から、北山落城、三山統一、島津侵略、又自然災害による暴風、早魃、悪疫等から、その地域に住んだ人々は自分達の生活を如何にして守りぬき、それぞれの難を凌ぐかという事から来たという呼称は、語感への安易な依存であり、シヌグの古さ深さを知る人人の賛意は大方得られないだろう。」といい、村落の長年の歴史を経て「安田の自然風土に即応し、苦しい生活の中の知恵とし、山も、海も神も人も参加した総合性、土に生きる庶民の純な心のよりどころとして、安田の村人の生活の中から生まれてきたというのが正しいようである。」と述べている（ほぼ同様の記述が宮城⁶⁾にあり）。

シヌグ祭祀は神人が冠でかぶるカーブイ、手に持つ祓い杖、身体にまとうもの、捧げものなどに植物の枝や葉や果実やツル茎を使う。身を飾る擬装用の植物材料は、神に扮するもの、古い時代の神か人かの風格をかもし出すもの⁶⁾、農林漁業を日常の暮らしとし裸身に近い生活をしていた村人が山の神に出会う儀礼のための正装ではないかと思われる^{8, 9)}。カーブイはおそらく神人になる確固たる象徴として重要な意味をもつと思われる。国頭村安田区と奥区では旧暦7月頃に果実の総苞が赤く開いて中に黒い種子をつける小高木のゴンズイの小枝を、米藁とナガバカニクサでつくったガンシナ（鉢巻）に挿してカーブイとする。なぜゴンズイをカーブイに使うかについて、ゴンズイの祭祀植物の意味や見方は、その開いた袋果の鮮やかな紅色と光沢のある黒い種子の形から方言名ミーハンチャと呼ばれ、目を大きく見開いて悪を射し悪魔を追い払う魔除けに結び付くというのが一般的ようである^{1, 6, 7)}（図1）。

前報で⁹⁾、植物種の対生葉序からゴンズイは祭祀植物の合掌型（十字対生型）とした。合掌型の十字対生葉序は拝む時の両手を合わせる姿勢に因んだもので、さらに魔除けのアジマー（卍型）にも

深く結びついて、祭祀植物の沖縄独自の特徴と考えられた。シヌグ神祭の植物観は、日本西南地域の照葉樹林域の神祭との関係から、主として樹木の葉序によって祭祀植物の分類が試みられたもので、祭祀植物そのものの内容や意味について立ち入って言及していない。祭祀植物の基本的要素は、



図1 開いた袋果をつけるゴンズイの枝葉（大宜味村根路銘、2007年8月）

照葉樹の葉序の他にその常緑性と葉形の全縁性の三つの特性が挙げられ、そのうちゴンズイは葉序の十字対生を有しているが、性質は落葉性、葉形は羽状複葉で小葉が鋸歯縁である。つまりゴンズイは祭祀植物の三特性のすべてを具備しているわけではないことになる。木の常緑性はおそらく常世につながり祭祀植物の重要な特性と思われるが、常緑性を越えて落葉性のゴンズイがシヌグ祭祀の要として用いられているのはきわめて興味ある史実が存在しているのであろう。

ゴンズイは常緑性樹種ではなく落葉性で、また単葉全縁ではなく複葉で小葉に鋸歯縁をもつ。なぜ、ゴンズイは祭祀植物の重要な条件を備えていないにもかかわらず沖縄のシヌグ祭祀のカーブイの主要材料に供用されるのか、祭祀植物としてのその民俗的な意義を明らかにするのはきわめて大事なことであると思われる。さらに、祭祀植物ゴンズイの民俗的意義からシヌグの起源や本質を追究することができないか、祭祀植物観を通して沖縄

の安田シヌグを考えてみたい。

安田シヌグの祭祀植物

宮城によると⁶⁾、安田シヌグはウフシヌグとウンザミ・ウンジャミの二つの祭祀があり、それぞれ隔年で交互に行われる。両祭祀とも旧暦7月初めの亥の日に行われ、どのような事情があっても開催日の変更はない。ウフシヌグはウキーウガミ(男拝)で男がたてられ、男性でヤマヌブイ(山登り)、ターンクサトゥエー(田草取り)、ヤーハリコーの行事が行われ、そして夜になると女性によるウシンデーグがありアサギマーでオモロを歌い輪踊りが行われる。かつては沖縄相撲大会もあったようである。本論では祭祀植物の関係から主にヤマヌブイに供用される植物について論考する。

ヤマヌブイはメーバ、ササ、ヤマナスの3組があり、部落のおよそ各門中が1か所に集まるが決まりがあるわけではなく、同じ門中で別の組に行く人もある。ヤマヌブイの行事が続けられているうちに、同じ門中の人たちが1か所に集まるようになったのではないと思われる。メーバ組は西方の伊部岳が見える山丘に上る古堅門中、西銘門中などが、北方のササ組は苗代田にたどる兼久屋門中、西平門中など、南方のヤマナス組は川を渡って田地を回る徳門門中などが多いようである⁶⁾。

2007年8月21日(旧7月9日)、ヤマナス組に参加した。家々で米藁のガンシナー(鉢巻き)を編み、野生のハンジャ(蔓、多くはナガバカニクサ)を巻き、果実と葉のついたミーパンチャー(ゴンズイ)を挿したカーブイをつくっていた。

【聞き取り】①70歳くらいの男、藁縄を編んでいる；ミーパンチャーは目に似ている、目が開く。ガンシナーは草、蔓が最初で稲作になってから藁を使うようになったのだろう。ハンジャ(野生カズラ)は今も使う。今は男が上るが昔は女であつ

た。昔は裸で陰部だけ覆った。②別の70歳くらいの男；昔は裸でシヌグの日は自分くらいのオジサンはフンドシを洗って準備していた。フンドシ以外の着物はないので蔓や草木で覆った。③50歳くらいの男；昔は3方の山に上る門中はそれぞれ決まっていた。ハルナー(畑地の名称)の別々に各山に上った。頭のワラ縄に挿す木はミーハンチャー、あとはとくに決まった植物はない。ミーハンチャーは赤い実と黒い種がついていないと意味がない。赤い実がはじけて脛が開いているから意味がある。目が見開いて悪を祓う。最近は山でミーハンチャーが少なくなり得にくくなっている、今年も昨日採集に山に行ったが集めにくかった。ゴンズイの他はとくに気をつけている植物はない。ハンジャをまとう。それに草を挿す。

行事の前にヤマヌブイの道や祭祀の場所の草刈りが行われている。正午頃各人が合図をしながら川端の広場に集まり、ヤマナス川を3~4回渡って目的の田地跡に着く。田地跡では太鼓に合わせてエーヘーホーイの声を掛け合いながら田の周りを3回まわる(図2)。今の田の跡は50坪くらいで周囲に猪垣があり、サンゴ石板を利用している。



図2 安田シヌグ祭祀のヤマヌブイ(ヤマナス組、2007年8月21日)

午後1:00ころ田地を出発、往復の道のりは違うがもとの道を帰る人もいる。途中川沿いの広場で

遅れる人を待って一息入れる。場所の背後はマングローブの低湿地で往時の水田の跡だろう、ミフクラギ、サガリバナが生育する。メーバ組の気配が分かったら出発、双方のエーハーホーイの掛け声で調子を合わせ橋の上で合流して山に行けない女性群に迎えられ、さらにササ組と合流して、原っぱで円陣を組んで回りながら、持っている木の枝の杖で円陣の中や周りにいる婦女子の頭を軽くたたいて祓い浄めを行う。海浜へ向かう道に沿う各家のお祓いをし、御嶽林の陰などで休んでいる年寄りのお祓いをする。

海浜では身にまとっていた草木を脱ぎ落とし、全員が正座して山に向かってそして太平洋の海に向かって、手を合わせて祈る。かつては祭祀に使用した植物をすべて海に流したそうだが、今は海を汚すからといって浜に置き、集積した植物は後で処理するようである。拝礼のあと海に飛び込んで、各人が災厄を海に流し去り、ヤマヌブイの行事が終わる。

ヤマヌブイの日に区長に依頼して、使用した植物を脱いで集積するとき組ごとにまとめて置くようにした(図3)。集積された植物は大体まとめられているが、煩雑で少々混じっていることもある。ヤマヌブイの場所が分かっているので、おおよその3組の植物が区分けできた。

1) ヤマナス組

〔身にまとう植物〕

ホウビカンジュ(カーブイ・冠もあり)、チガヤ(冠もあり)、クワズイモ、シロダモ、ゴンズイ、オオアブラガヤ、ハマサルトリイバラ、シロヤマゼンマイ、モクタチバナ、クズモダマ、トウズルモドキ、ヒリュウシダ、ダンチク、シシアクチ、ホソバムクイヌビワ、サキシマフヨウ、ヒカゲヘゴ、クロツグ、ハマイヌビワ、オオバルリミノキ、ガ



図3 安田シヌグ祭祀に使われた植物;今は海に流すことなく浜辺に積んで処理される
(2007年8月21日)

ジュマル、サカキカズラ、オオバギ、シラタマカズラ、タブノキ、バラグラス、アカメガシワ、イヌビワ、カキバカンコノキ、クチナシ、ノアサガオ、コンロンカ、フウトウカズラ、アオノクマタケラン、ビロウ、タブノキ、ナガバカニクサ、ヒョウタンカズラ、コシダ、ヒカゲヘゴ、ススキ、ヤマドリヤシ、ハスノハカズラ、リュウビンタイ、オキナワサルトリイバラ、エビズル、ホシダ、カクレミノ、リュウキュウマノスズクサ、ケホシダ、ススキ、ショウベンノキ、シマイズセンリョウ、アカミズキ、シイノキカズラ、フカノキ、マルバドコロ。

〔杖・祓い〕

シロダモ、アカメガシワ、ハマイヌビワ、クチナシ、モクタチバナ、イヌビワ、タブノキ、オオバルリミノキ、アオバノキ、アカテツ、オオムラサキシキブ、ホソバムクイヌビワ、ヤマビワ、モチノキ、ショウベンノキ、シマイズセンリョウ、シシアクチ、カクレミノ、フカノキ、トベラ、アカギ、オオバギ、ネズミモチ、サキシマフヨウ、リュウキュウマユミ、ショウロウクサギ、ダンチク、アカミズキ、ヤブニッケイ、アデク。

2) メーバ組

〔身にまとう植物〕

オオシンジュガヤ(冠もあり)、ゴンズイ、ヒカゲヘゴ、アオノクマタケラン、ヒリュウシダ、トウヅルモドキ、オオバイヌビワ、ツルムラサキ、ヒョウタンカズラ、ススキ、クズモダマ、リュウキュウマノスズクサ、ハマサルトリイバラ、コシダ、シラタマカズラ、ピロウ、イタジイ、リュウキュウカラスウリ、ススキ、ギーマ、アカメガシワ、ショウベンノキ、ボチョウジ、クロツグ、フウトウカズラ、アカテツ、タブノキ、ホウビカンジュ、シロヤマゼンマイ、クチナシ、ニシキアカリファ、カクレミノ、ナガバカニクサ、オオバイヌビワ、ノアサガオ、モクタチバナ、ヒョウタンカズラ、ワラビ、ツルムラサキ、クチナシ、ヒカゲヘゴ、シロヤマゼンマイ、ホウビカンジュ、シロダモ、シマイズセンリョウ、ホウライチク、アカミズキ、ノアサガオ、ホソバムクイヌビワ。

〔杖・蒔い〕

シマイズセンリョウ、イヌビワ、シシアクチ、タイミンタチバナ、シロダモ、クロキ、アデク、カンコノキ、ヒサカキ、ホソバムクイヌビワ、ヤマグワ、オオバルリミノキ、アカメイヌビワ、ガジュマル、アカギ、マテバシイ、アカミズキ、タブノキ、ショウベンノキ、モクタチバナ、ハマイヌビワ、シバニッケイ、アカメガシワ、イタジイ、ホウライチク、フカノキ、ヤマグワ、ヤマヒハツ、サキシマフヨウ、クチナシ。

3) ササ組

〔身にまとう植物〕

ゴンズイ、ヒカゲヘゴ、ハマサルトリイバラ、リュウビンタイ、ピロウ、クズモダマ、サクララン、ダンチク、ススキ、ハマイヌビワ、イタジイ、シマイズセンリョウ、オオバギ、モクタチバナ、ナガバカニクサ、フウトウカズラ、ハマビワ、ノアサガオ、ケホシダ。

〔杖・蒔い〕

モクタチバナ、ショウロウクサギ、ホソバムクイ

ヌビワ、トベラ、シシアクチ、フカノキ、アカミズキ、ショウベンノキ、ハマイヌビワ、ホウライチク、カクレミノ。

2013年8月13日(旧7月7日)は、メーバ組のヤマヌブイに参加した。ヤマから隊列して下りていく男神の身につけている植物を観察すると、〔カーブイ・冠〕には稲藁にゴンズイ、ヒカゲヘゴ、コシダ、ソテツ、リュウキュウマツ、オキナワシャリンバイ、タブノキ、クチナシ、ギーマ、オキナワスズメウリ、ヤマモモ、〔身にまとう植物〕にはナガバカニクサ、オニヘゴ、ヒリュウシダ、ワラビ、ツワブキ、ピロウ、トウヅルモドキ、ノアサガオ、ハスノハカズラ、クロキ、クズモダマ、リュウキュウマノスズクサ、シラタマカズラ、センニンソウ、〔長さ1.5~3mくらいの杖;蒔い用〕にはモクタチバナ、ホソバムクイヌビワ、アデク、イタジイ、コバンモチ、イスノキ、シバニッケイ、ムッチャガラ、シマミサオノキ、カクレミノ、シロミミズ、クロキ、シシアクチなどがある。

合流した他の組には〔カーブイ〕にホウビカンジュ、フカノキ、〔身にまとう植物〕にシロヤマゼンマイ、モクマオウ、サツマサンキライ、クワズイモ、クロツグ、〔杖〕にマテバシイ、ボチョウジ、ハマイヌビワ、ヒメユズリハ、クチナシ、ゴンズイ、ショウロウクサギ、シロダモなどが観察された。

メーバ組の上る山丘は、おそらく山地段々畑の跡地で山火事を起こしたことがあるといい、その後に移したリュウキュウマツ二次林でゴンズイがよく生育する場所と考えられるが、現場の個体数はきわめて少なく立木についている果実も貧弱であった。男たちの言によると、今年はゴンズイの実が少ないのはこの長くひどい旱魃、昨年台風の影響が大きく、部落内のゴンズイ植林地では枯れたり生育がよくないという。

安田区のシヌグ祭祀に使用される植物をみると、

カーブイは藁縄とナガバカニクサのガンシナーに挿す植物としてゴンズイ以外には決まりがなくどんな植物も装飾になるようである。身にまとう植物は、ヤマヌブイの準備から上り下りのときに身近に生育しているものを切ったり手折ったりして身を飾り、決まりがない。杖・祓いの木も同じように特別に決まっているものがなく、ヤマヌブイの時や目的地のヤマで採取して使う。従ってヤマヌブイの上り下りで身にまってくる植物は屋敷周りや山道沿いの比較的明るい場所に生えるものである。身につける植物は、今は陰部を覆い隠す目的より全身にまとう装飾用になっている感じである(図4)。



図4 安田シヌグ祭祀の男神のすがた(2007年8月21日)

ゴンズイは袋果が熟し赤く裂開して中の黒い種子が出るといかにも鬼の形相が思い描かれるが、他方、シヌグの祭祀植物にゴンズイを用いるのは特別に意味があるわけではなく、果実の熟期がシヌグ祭祀の時期と一致し裂開した袋果が美しいので使ったという話もある⁹⁾。いくつかのいわれが思考されている中で安田区と奥区では長年にわたっ

てカーブイにゴンズイが用いられ継承されてきたのである。山原の国頭山麓にあって他村との交通がきわめて希な村落で、シヌグ祭祀は人と神が一体となって村落の持続と発展を祈願する重要な行事である。シヌグ祭祀の神人の証しともいえようカーブイの植物材料として長々と受け継がれ供されてきたゴンズイは、単に熟果がその時期にあるという薄俗の流れではなく、山林と田畑と海域を日々の営みの場とする村落の深い土俗の由縁に根ざしたものにちがいない。

ゴンズイの性質と名称からみえる シヌグ祭祀植物の意味(1)

1) 性質

ゴンズイ (*Euscaphis japonica*(Thunb.)Kanitz) はミツバウツギ科ゴンズイ属の落葉小高木で、この属は東アジアの特産でゴンズイ1種だけからなる。ゴンズイは日本の暖帯林域に属する関東地方以西、四国、九州、琉球列島、台湾北部、中国中部の長江流域各省に分布する^{10, 11, 12, 13)}。琉球列島では沖縄島南部、大東諸島、宮古群島、八重山群島の竹富島や黒島など琉球石灰岩を母材とする島を除いてほぼ全島に分布し¹⁴⁾、主として非石灰岩地の小高い山地林に生育する。照葉樹林の林分に出現することもあるが、生育地はおおよそ自然林や造林地の林縁また林道・山道の沿線でマント群落の構成種となり、リュウキュウマツの造林地や二次林のやや明るい林分に多くみられる。

このように生育地の特徴からして、ゴンズイは森林の遷移の初期から途中相の植生に出現する樹種で、台風など自然かく乱による天然林の再生、人為的な森林伐採・造林事業による里山の再生林・二次林の構成種であることが一般的と考えられる。この2、3年間ゴンズイの生育が不良でカーブイに挿す材料の採取に窮しているとき、そ

の原因として台風や長期旱魃など気象条件が挙げられているが、あるいは近年人の暮らしが森林と遊離し、人のくり返される利用と更新・再生によって維持される里山が鬱蒼たる自然林に進行遷移して、明るい場所に多く生育するゴンズイの発生・発達に照葉樹林のなかで促されないという自然再生の生態的要因も一考するに値するだろう。

形態は、通常樹高が3~7m、直径が2~5cmくらい、枝は紫黒色を帯びて無毛、細長い皮目がある。葉は対生、奇数羽状複葉で長さ20~30cmとなる。小葉は3~5対(通常5~9枚)、狭卵形、長さ4~8cm、幅2~4cm、やや厚く無毛で上面光沢があり、鋭頭、円脚、微鋸歯縁をなし、中肋は両面に突出して紫紅色を帯びる。花は両性、頂生の円錐花序、幅広く多数、6~15cmの長い柄があり、花弁は黄白色となり5個で径4~5mm。果実は袋果をつくり肉質、長さが1~1.3cm、袋果は1つの花から1~3個に分かれ(分果)、熟すると反曲して開出し、裂開すると内面は鮮紅色で美しい。種子は開出した果皮につき、分果に1~3個、ほぼ球形で黒色、光沢があり、大きさが5~6mmである^{10, 11)}。

花は3月から4月にかけて咲き、袋果は6月下旬から8月頃に熟し、1~3個の分果は卵形または広楕円形で果皮は2つに裂開する¹⁵⁾。袋果の熟期は旧暦では5月から7月頃になり、およそ旧盆前に分果が裂開して光沢のある黒色の種子をつけ、ちょうどシヌグ開催の頃に鮮紅色に染まる果皮の内面を開いてみせることになる。

2) 方言名と漢字名

木や器官の形態、色や匂いなどの性質からゴンズイの別名・地方の方言名・漢字名を挙げると、日本では、深津ほか¹⁶⁾野鴉椿・栲、上原¹⁷⁾から、キツネノチャブクロ、スズメノチャブクロ、ムメボシノキ、カラスノサンセウ、ツミクソノキ、ハゼナ、クロハゼ、ダンギナ、ハナナ、ダンギ、ク

ロクサギ、ゴマノキ、デノキ、ミゾユズ、タンキリ、メータマ、ゴンジイ、ミーファンチャー、ゴゼノキ、ナラカバ、ナベブチ、クロキナ、ダイキナ、イヌノクソ、ショウベンキ、ウマノショウベンギ、ショウベンボウ(ショウベンボー・千葉、¹⁸⁾)、イヌタン、マルオチャムタイ、権萃、野鴉椿、大眼栲、栲、大眼桐、牛王杖、瓦目、武目、臭椿、婆娑羅樹、悪木がある。また四国ではショーベンノキ(愛媛)¹⁸⁾、ショウベンギ・ウマノショーベンギ(高知)¹⁸⁾、九州ではショーベンノキ(長崎、鹿児島)・ゲンダノツ(鹿児島三笠)・ミズヨス(鹿児島甑島)¹⁸⁾がある。

琉球列島は、天野^{19, 20)}、新里^{21, 22)}、仲間²³⁾、大野²⁴⁾から、①奄美大島;メハチク、ティサン、ナブイワリ、イリキケ、(笠利)アブラギイ、(宇検)イリキケ、(名瀬)トンニユクス、ナベワリ、トンニユクス、(住用)ナベワラ、(瀬戸内)ヤマフチャ、(大和)ナブイワリヤ、②徳之島;アブラギイ、トゥンヌクスギイ、③永良部;ヤマジン、④伊平屋;(我喜屋)ミイハジギー、⑤沖縄;ミイハンチャー、(奥)カツオキ、カチューギー、ミーハンチャ、ミーハンタ、(安田)ミイハンチャギー、(辺野喜)ミイファンチャ、(与那)ハチャグミ、(辺土名)ミイハンチャー、(饒波)ミイファンカ、(宇茂佐)ミイハジチャー、(世富慶)ウシヌミンタマー、ヤマミイハンコー、ミイハンチャオイ、(許田)ヤマバンキ、(幸喜)ミイパンカー、⑥久米;トウイヌチビ、⑦石垣;ミイパガキ、⑧西表;ジーピカキがある。台湾では野鴉椿・烏隴花¹³⁾、中国では野鴉椿¹²⁾がある。

ゴンズイの琉球地方の方言名の由来は、木の大きさ、樹形、材質、葉序や葉のかたち結びつくものはみあたらず、熟した果実や枝葉の匂いなどの性質に関するものがほとんどである。ゴンズイは祭祀植物の分類で葉序や葉のかたちなどから合掌型とされたが⁹⁾、方言名からみると祭祀植物とし

での利用は果実の形や色および枝葉の匂いの性質に因んでいることが考えられる。シヌグ祭祀植物のカーブイに用いられるゴンズイは、主として裂開した袋果の形や内面の赤色および枝葉の匂いによる縁がありそうである。

3) 袋果のかたちと色

琉球列島の方言名について、ハチャグミはおこし(艸)の意で、ミイハンチャー、ミイファンカは臉をうら返す意で果実の裂開している状態が臉をうら返したような感じがすることに由来する¹⁹⁾。ミイハンチャーと同様に、袋果が裂開して中の赤色と種子の黒色のすがたから付けられたとみられる方言名には、メハチク、ミイハジギー、ミイハンチャギー、ミイファンチャ、ミイハンチャー、ミイハジチャー、ウシヌミンタマー、ヤマミイハンコー、ミイハンチャイ、ヤマバンキ、ミイパンカー、ミイパガキがあると思われる。シヌグに供用されるゴンズイの一般に言われている意味は、これらの方言名と厄除け・悪除け・魔除けの効用が重なったものだろう。

祭祀植物の分類で、合掌型は十字対生葉序によるものであるが、方言名からほぼ同様の意味で袋果が開いたかたちに求められるのではないと思われる。袋果は子房が1心皮からなりその合わせ目だけから縦裂・裂開する²⁵⁾。要するに図5のように、ゴンズイの袋果は1~3個に分かれ、分果はそれぞれ2つに裂けるが、これらの果皮は離散することなくくっついたまま2つに開いた状態になる。この開いたかたちが女性の性器に似ているとして、このことからゴンズイを祭祀植物に用いているのではないかという(国頭村奥区在住の昭和26年生男性の話・新里メモ2010)。

植物名またその方言名には男女あるいは動物の性的、性器、乳に由来したものが多々あり¹⁹⁾、ホーフックワー・マラフックワー(ミフクラギ;陰部にその木の樹液をつけると陰部が腫れる)、ホー

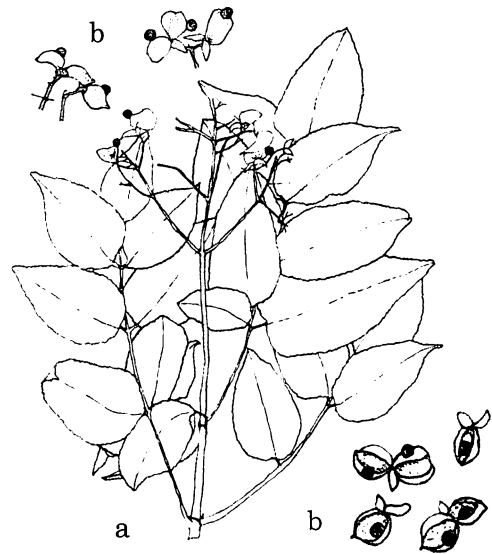


図5 ゴンズイの枝葉と袋果：袋果のついた枝葉 (a)、2個に開いた分果と種子 (b)

ギ(ホーギー・ポークサギー;新里メモ2003年2月、イボタクサギ;女性陰部の木の意でこの木の葉を揉めば悪臭を発生することに由来、ハマゴウ;同)、ポークスイク・マラクスイク(シキミ;女陰糞モッコク・マラ糞モッコクの意)、クカ・クガ・クガー・クーガー・フガー(ナシカズラ;睾丸の意で果実の形と色が睾丸に似ることに由来)、ハーメーカーギ・フギクサ(イタチガヤ;お婆さんの陰毛に似た草)、シマヌマラチン(トウモロコシ;馬のマラきび)、ピーミーウサ・マラミーウサ(ハマボス;女性・男性の性器を見る草)、アンマーチー・アンマーチチ・シマガツウギ(アカテツ;お母さんのお乳・お乳の出る木)、クガー・マヤークーガ(タマシダ;睾丸・猫の睾丸)、クーガヤマン(ハリイモ;睾丸に似た山芋)、タニハンキー・マラハンカー(ノボタン;亀頭の包皮を反転させる意)、マラウイフサ(ナンバンギセル;マラ起きる草)、フォーフッカギー(オオバイヌビワ;女性の性器が腫れる木の意でこの木の樹液が女性の性器に触れると性器が腫れることに由来)、アンマーチーギー(イヌビワ;お母さんの乳房の意で果実

の形態が乳房に似ること由来) などである。

アケビはゴンズイと同じ袋果で、熟すると1つの筋を縦に裂けて果皮がくっついたまま2つに開く。閉じたままの実をつけるムベのムに対し、アケビは開く実のアケ+ミービの転訛であるが、“開けツビ” だとして古代人がその実の形態を女性の性器を連想してつけたとする説もあるという²⁶⁾。上原¹⁷⁾は「古名録によれば阿介比は開玉門アケツビなりと、和名抄では玉門は女陰の名なり、通鼻と、この実熟裂で女陰の如し、汝になつく」と記してある。同様に多和田²⁷⁾も「日本本土にアケビ(一名ヤマムスメ)という山の果物があるがこの実は熟すると紫色になり縦にさけて口を開くのでアケミ(開女陰)からアケビとなったものである」と述べている。

方言名でアザカイ・アガザイ・アジケーなどと呼称されるシャコガイの貝は魔除けの呪具に用いられる。シャコガイは貝の二枚の口を開いた形が女陰に似ているからとされて安田区では幽霊がでるといわれる屋敷の門口に、シャコガイの口縁を半開きにして上に向け、その中にダシチャクギと呼ばれるシマミサオノキあるいはアデクの木片を入れて埋めたとされ^{27・28)}、国頭辺りでは家の新築の時など屋敷内にアジケーを埋め、宮古群島多良間島は産児の胎盤をシャコガイに入れて台所の裏に埋め、石垣島平得は種取祭の日に夜明けの浜でシャコガイの殻に酒を満たし豊年を引き寄せる神の力として一気に飲み干す習俗があったといい、うるま市津堅島はシャコガイの二枚の殻を半開きにして門の両側や道路のつき当たりの塀に置いてムヌキムン(魔除け)にする²⁹⁾(津堅島の門のシャコガイは新里も実見、図6)。

「子安貝は宝貝のことであるが、この形状が女陰に似るところから、この貝を握ってお産をすれば安産が得られるとする俗信がある」という³⁰⁾。さらに野本³¹⁾によれば、奈良県生駒郡石床神社の

磐座、出羽三山湯殿山神社の靈巖などは女陰の象徴であり、万物生成、農作物の豊穰などをもたらす神として信仰され、島根町(現松江市)の、出雲の加賀潜戸の日本海の断崖に大きな岩穴があり、そこを訪ねる時「漁師が海辺の洞窟を信仰するのは洞窟を女陰に見たてるからなんです」という言葉を思い出すという。また「潜戸」とは「潜り処」の意であり、海辺の洞窟を潜りぬけるのは禊の場の聖地として「海の胎内くぐり」の祖型をみることができるといふ。



図6 家の門にかざすシャコガイの2枚に開いた貝(うるま市津堅島、2013年2月)

動植物の器官あるいは自然物の形象について、それが2つに裂けて開くすがたや自然物そのもののすがたにも女陰あるいは母胎の象徴となるものがあり、それらは神として崇められ、再生、活力、生産、豊穰を礼拝する村落民の信仰を集めるようになっていく。折口³²⁾も植物と女性の生殖器について述べ「植物の花にすら生殖器類似のものがあれば、それを以て魔除けに利用する例はたくさんある。あの五月の端午の菖蒲のごときも、あやめ、しゃが、かきつばたなど一類の花を、女精のしむぼるとしてあるのから見ても知れよう」とする。

ゴンズイの裂開した袋果の果皮の鮮やかな赤色と光沢のある黒色の種子を合わせて悪魔の形相を

連想させるが、シャコガイの半開きした二枚の殻の形が女性の性器に似ていることから魔除けの呪具となり、ゴンズイの袋果の果皮がくっついたまま2つに裂開した形にも同じような意味が込められているということだろう。もう一つ、「紅は太陽の色であり血の色であり、古代人にとってもっとも神聖な色であった」³³⁾といわれるように、ゴンズイの果皮の鮮やかな赤色にも何らかの意味が求められそうである。クリスマスカードなどによく描かれるホリーはモチノキ科の常緑樹で、その葉腋に円い赤い漿果を結び、殊に冬期に顕著なためめでたい木として貴ばれるという³⁴⁾。前川は³⁵⁾、人は原始的な生活のころから吐く息の暖かさや体温や生きている時の赤味に気づいて、血が出て死に乳を飲んで子が育つことに神秘的で何かの力を感得し、チもチチも体内から発する強い力であり漿液の最も優なるものとして、チが赤を意味しチチが白と甘味を意味する例が植物にも相当多くあると述べている。

例えば前川は²⁶⁾、大きな葉をもつ草本のアオイ科のイチビ、クワ科の常緑ツル性のイタビ、バラ科の果実を食べるイチビゴ(イチゴ)があるとして、イチゴはイチビゴのゴが脱落したものとするが、ゴはイチゴ類の果実で小果が集まっていることで児を連想し、イは接頭語、チは血のように赤くなった果実を食べることで、イ・血(チ)・実(ビ)・で児(コ)を添えたに違いないという。イタビはイチジク型の果実をつけ、その実を割ると白い乳のような汁がしたたり落ちるが、その乳汁から乳を連想しチチ(乳)のミ(実)からイタビと訛ったものであろうとする。イチビは火口(ほくち)をその幹から製するので打火(うちび)の転訛といわれているが、この類はシキミの実のように果実の多くの分果が平板にリング状に並ぶので、イタミ(板実)が訛ってイチビになったのではないかという。

因みにシキミはモクレン科の常緑小高木で、寺や墓地などに植えられ、全体に香気があり生枝は仏事、樹皮・葉は抹茶や線香、果実は牛馬の寄生虫駆除に用いられる³⁶⁾。イタビと同じクワ科の、沖縄でアンマーチーギーまたマツビ²¹⁾と呼ぶイヌビワは、屋久島南部の尾之間(ここでは方言名タブノキ)では正月14日に母指大の枝を長さ5寸位に切り、皮をはいだ先の半分には墨で輪をかき、元の方はケズリカケにし、これを神前あるいは柱の根元に立てる¹⁸⁾。いずれにしても、チやチチの植物用語の語源は人の生命の根底を流れる漿液にたどるものであろう。

ゴンズイの開いた袋果の鮮紅色は、深い緑色に染まる夏の森を一大祭典のように美しく際立たせる。赤色はまた民俗の、めでたい事や祝行事など慶事の華やかさを表現しているように映る。

国旗は国を表徴するもの、標識となるもので、各国の国旗にはほとんど赤色の背景や模様が入っている。アジアでみると、日本は赤と白、中国は赤と黄、その他赤が著しい国は台湾、モンゴル、ベトナム民主共和国、ラオス、インドネシア、シンガポール、マレーシア、フィリピンなどにあり、赤は国家の基本を表徴する色となるようである³⁷⁾。

赤帝は中国太古の五人の天子の一つ、南方また夏をつかさどる神、五行説で南・夏にあたる色は赤であり、漢は火徳の王朝となり赤色をとうとぶからという³⁸⁾。赤引は日本の蚕の一品種で、成熟した蚕は赤味を帯び、繭が大きく質がよいという³⁹⁾。その赤引糸は伊勢神宮の神御衣祭(かむみそさい)のときに奉納されるようである。神御衣祭は天照大神の衣替えで赤引糸の絹糸の色は白であるが、赤は赤心・明るく清らかなの意で、清浄な中で育てられた蚕糸を原料としていることによるといわれている⁴⁰⁾。平安神宮その他の大きな神宮や神社などの鳥居も赤色が多くみられる。

沖縄での赤は、正月はニントウガミ(年頭拝

み)の仏前にアカカピー(赤紙)の赤・白・黄の紙を重ね供えて花を生け供え物をするが、供え物の器も普通に赤色である。生地の本部町で少年のころに見た死者を墓に運ぶ籠(がん)は赤色に塗られていた。長寿祝には赤色の衣・ちゃんちゃんこ・帽子・鉢巻を身につけ、祝い事には赤飯を炊き、天寿を全うしたときには紅白の饅頭を配る、などに表される。カジマヤー(97歳の祝)は「赤子にかえる」という意の長寿祝いといわれ、翁媪は着物から帽子とほぼ全身が朱色に染まる。その姿は赤子を表して、厄を祓い蘇生する生命のチの転生を祝福しているように思われる(図7)。そのカリー(嘉礼、めでたい)を家族、親戚、知人みんなで祝いアヤカル(幸福を分かち合う)のである。



図7 カジマヤー祝：朱色の帽子・鉢巻とちゃんちゃんこ(うるま市与那城、佐久田正夫・ツル氏夫妻、2013年10月)

引用文献

- 1) 国頭村役所「国頭村史(別冊)」1967年、国頭村役所、沖縄
- 2) 仲田善明「本部のシヌグ」2003年、沖縄学研究所、東京
- 3) 玉城菜美路「祭祀—シヌグを事例に—」2013年、やんばる学研究会・創刊号、沖縄
- 4) 知花博康「村内におけるシヌグ及びウンジャミの分布」1982年、「安田のシヌグ」国頭村教育委員会、沖縄
- 5) 幸地 哲「安田のシヌグについて、概説」1982年、「安田のシヌグ」国頭村教育委員会、沖縄
- 6) 宮城定盛「国頭村安田のシヌグ考」1976年、安田古文化財保存会、沖縄
- 7) 東恩納寛正「安田のシヌグ伝承」1982年、「安田のシヌグ」国頭村教育委員会、沖縄
- 8) 新里孝和「時計のない暮らしがしてみたいね—うつぐみの竹富島、ティードウンの夏休み—」2009年、ティードウン日記刊行会、沖縄
- 9) 新里孝和「沖縄シヌグ神祭の植物観」2013年、名護博物館紀要「あじまあ」17、沖縄
- 10) 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑(木本編Ⅰ、Ⅱ)」1973年、保育社、大阪
- 11) 初島住彦「琉球植物誌(追加・訂正版)」1975年、沖縄生物教育研究会、沖縄
- 12) 中国科学院植物研究所「中国高等植物図鑑、第二冊」1972年、科学出版社、中国
- 13) 劉業経「国立中興大学農学院叢書第六號、臺灣木本植物誌」1972年、国立中興大学農学院出版委員会、
- 14) 初島住彦・天野鉄夫「増補訂正・琉球植物目録」1994年、沖縄生物学会、沖縄

- 15) 澤岨安喜「シリーズ沖縄の自然Ⅱ木の実・木のたね」1983年、新星図書出版、沖縄
- 16) 深津 正・小林義雄「木の名の由来」1985年、日本林業技術協会、東京
- 17) 上原敬二「樹木大図説」1983年、有明書房、東京
- 18) 倉田 悟「樹木民俗誌」1975年、地球社、東京
- 19) 天野鉄夫「琉球列島植物方言集」1979年、新星図書出版、沖縄
- 20) 天野鉄夫「琉球列島有用樹木誌」1982年、琉球列島有用樹木誌刊行会、沖縄
- 21) 新里孝和「与那演習林の植物（Ⅰ）1. 樹木目録」1972年、琉球大学農学部学術報告 19
- 22) 新里孝和「国頭村奥の植物方言」2012年、名護博物館紀要「あじまゝ」16、沖縄
- 23) 仲間勇栄「島社会の森林と文化」2012年、琉球書房、沖縄
- 24) 大野隼人「奄美群島植物方言集」1995年、奄美文化財団、鹿児島
- 25) 清水建美「図説植物用語事典」2001年、八坂書房、東京
- 26) 前川文夫「植物の名前の話」1998年、八坂書房、東京
- 27) 多和田真淳「古琉球の祭具」1963年、沖縄タイムス 11月3日～14日、沖縄
- 28) 多和田真淳「シャコガイ魔除け」1983年「沖縄大百科事典・中」、沖縄タイムス社、沖縄
- 29) 三島 格「貝をめぐる考古学—南島考古学の視点—」1977年、(株) 學生社、東京
- 30) 野本寛一「生態と民俗 人と動植物の相渉譜」2008年、講談社、東京
- 31) 野本寛一「神と自然の景観論 信仰環境を読む」2009年、講談社、東京
- 32) 折口信夫「古代研究」（全集第三巻、民俗学篇 2）1966年、中央公論社、東京
- 33) 富山和子「水の文化史」1981年、文藝春秋、東京
- 34) 武田久吉「民俗と植物」1999年、講談社、東京
- 35) 前川文夫〔日本人と植物〕1973年、岩波書店、東京
- 36) 吉田金彦・編著「語源辞典・植物編」2001年、東京堂出版、東京
- 37) フランク・B・ギブニー・編集「ブリタニカ国際大百科事典」1974年、ティビーエス・ブリタニカ、東京
- 38) 小川環樹・西田太郎・赤塚 忠「角川新字源」1988年、角川書店、東京
- 39) 金田一京助「辞海」1960年、三省堂、東京
- 40) 南里空海「伊勢の神宮、祈りの心・祭りの日々、日本人の原点垣を求めて」2003年、世界文化社、東京